

あやかし蔵の管理人

朝比奈 和 Nagomu Asahina



アルファポリス文庫

何もない野原を、風が撫ぜるように吹く。

虚ろな頭でその様を見つめていた俺は、ふと自分にかかる影に気が付いた。

見上げると丸く輝く大きな月を背景に、着物姿の人が自分を見下ろしている。

その顔は陰になっていて、誰だかわからなかった。

知り合いたろうか？

白銀色の長い髪が、風になびいて揺れる。月の光に輝くその髪は、絹糸の如き光沢があった。

「誰？」

そう尋ねると、相手が小さく息を呑む。

「零れ落ちたか……」

静かに呟いて、俺の頭を優しく撫でた。

言っている意味はわからないが、声のトーンから淋しげなのはわかった。

何か言いたいのには、どう声をかけていいのか迷う。
 その時、ふいに風が吹き荒び、厚い雲が月を隠した。
 漆黒の闇に吞まれていく人影に、俺は手を伸ばす。だが、俺が掴む前に、白銀の
 髪の本さえ残すことなく、その人はすり抜けて消えた。

*

「は……」

何かを言いかけて、俺——小日向蒼真——は目蓋を開けた。

カーテンの隙間から差し込む日の光に二度三度瞬きして、自分が天井へと手を伸ばしていることに気が付く。

……何してんだ、俺。

腕を落として、むくりと起き上がる。

何の夢を見てたわけ？ よく覚えていないが、胸にぼつかりと穴が空くみたいに、悲しい夢だった気がする。

夢の内容を思い出そうとしてみるが、欠片も浮かんでこなかった。

まあ、いいか。夢は夢だし。

伸びをして、起きたばかりの体のこわばりを解く。

まだ六時半か……。日曜の朝だから、もう少しゆっくり眠っていても問題ない。

そうは思っても、先ほどの夢を再び見ってしまう気がして、もう一度眠る気にはなれなかった。

欠伸をしながら洗面所に行き、冷たい水で顔を洗う。ようやく頭が冴えてきた。

キッチンに行くと、母親がピンクのフリルエプロンをつけて目玉焼きを作っていた。年齢的に考えて、そのエプロンはどうだろう。そう思うが、童顔で小柄な母は、ひいき目なしで可愛らしい部類に入り、実際エプロンも似合っていた。

決してマザコンではないが、授業参観に母さんが来た時はちよつと自慢だった覚えがある。

「おはよう」

「蒼ちゃん、おはよう。日曜なのに早いね。でもタイミング良かったわ。今、朝食が出来たところだから」

そう微笑んで、食卓に焦げた目玉焼きを置く。
料理があまり得意ではない母は、三回に一回は目玉焼きを焦がす。
今日は失敗かあ……。

内心ため息を吐き、食卓に着いた。すでに父親が座っていて、難しい顔で新聞を読んでいた。

「おはよう」

「ん」

無口な父が返す挨拶は、大抵こんなものである。

昔からこうなので、腹が立つということもない。

そんな感じで始まった、家族揃っての朝食は、ごくごく普通の何の変哲もないものだった。

だが、母のある一言によりそれは一変する。

「蒼ちゃん。実は急にお父さんがアメリカに海外赴任することになってね。だから、お母さんもお父さんについて行くわ」

それはまるで「今日、スーパードに行くわ」とでもいうような気軽い言い方

だった。

朝から何の冗談だ。だが、我が母がその手の冗談を言わないことも知っている。
突飛な行動に出るうえに、何に対しても真つ直ぐな性格なのだ。

「それ……本気で言ってるの？」

困惑しつつ確認すると、清々しいまでの笑顔で頷かれた。

母の隣に座る父に、視線でその真偽を確かめる。新聞から目を離し、チラリとこちらを見て父は、「まあ、そういうことだ」と言った。

そういうこと？ 父さんの海外赴任に、母さんがついていくことが？ ……あれ？ 待てよ。

それが本当だとすると、先ほど母が言った内容に少々ひっかかりを覚える。

俺の名前が出てきていない。

「え、じゃあ、俺は高校どうするの？ 入学してひと月も経ってないのに。転校……

いや、留学？ 俺、英語全然出来ないんだけど」

「そうなのよねえ。蒼ちゃん、英語全然出来ないものね。お父さんもお母さんも話せるのに、どうして駄目なのかしら」

母は頬ほおに手をあて、ため息を吐いて嘆なげく。
 そんなの、俺が知りたい。

母さんが言うように、両親は英語がペラペラだ。そもそも二人の出会いが海外留学中だったし、幼い俺をばあちゃん家に預けて海外赴任をしていた時期もあった。

その一人息子である俺はというと、英単語さえ受け付けず、いつも赤点ギリギリの成績である。遺伝子的には素質があるはずなのに、何故だ。

「日本人学校も考えたんだけどね。蒼ちゃん、海外の雰囲気自体に生まれちゃうでしょう？ 性格的に、海外生活は無理だと思っうのよね」

否定したい気持ちはあるが、ハッキリ言っつてその通りである。

恥はづかしい話、俺は人見知りが激しい。

慣れたら普通に会話出来るが、そこまでに至るきっかけづくりなどが苦手なのだ。

高校の同級生には、同じ中学出身者が殆ほとんどいないため、未だにクラスメイトと会話をするのも緊張する。

こんな俺が、海外のハイレベルなコミュニケーションについていけるはずもない。

「つてことは、俺はこっちに残って一人暮らし？」

昔預けられていた母方のばあちゃんはもう亡くなっているし、父方の親戚は皆、海外生活をしている。日本で頼れそうな身内はいなかった。

『高校生の身で一人暮らし』というのもいささか不安ではあるが、家事は一通り出来る。

外国について行っつて、新しい環境と語学の壁でストレスを感じるくらいなら、断然日本に残って一人暮らしがいい。それに、親から離れての自由な暮らしというのも、男子として憧れがある。

「一人暮らしは駄目だ」

浮つき始めた俺の気持ちを、父がもの見事に一蹴いちしゅうする。母もこくこくと頷いた。

「高校生が、一人暮らしなんて駄目よ。心配だわ」

俺に学校や部活があるのいいことに、二人だけでしょっちゅう旅行に行っつて、家を空けているのはどの誰だ。

「じゃあ、俺はどうすんの？」

不機嫌さを隠さず言っつと、母はにっこりと微笑んだ。

「安心して。おばあちゃんの知り合いの結月ゆづきさんに、蒼ちゃんを居候いせうさせてくれる

よう頼んでおいたから」

まったく考えてもいなかった提案に、一瞬固まった後、俺は叫んだ。

「はっ!? 居候!？」

「初めは、寮や学生用のシェアハウスを探していたのよ。でも急だったし、时期的にいい所が見つからなくてね。それで結月さんに連絡してみたの。不動産をいろいろ持っている方だって、前におばあちゃんから聞いたことがあったから。そうしたら『うちに来たらいかがですか』って、仰っただかさったのよ」

俺は呆気にとられた状態でその話を聞いていたが、ハツとして手を左右に振った。

「い……いやいや、だからって居候なんて嫌だよ」

「でもねえ。とってもいいお話なのよ。結月さん、お仕事が忙しくて、家のことに手が回らないらしくてね。蒼ちゃんが家事を手伝ってくれば、お家賃どころか生活費も一切いらなくていいのよ。太っ腹よねえ」

「家事をする条件で……生活費がいらない?」

条件が良すぎやしないか、それ。

「蒼ちゃん、お料理とかお掃除得意だものねえ。いい息子に育って良かったわ」

そう明るく言う母に、俺はげんなりとため息を吐く。

得意というわけではない。人並み程度だ。俺より母さんが、家事が得意なだけだろう。

俺は焦っているうえ、放置されて冷えた目玉焼きを見下ろす。

「俺が家事をやるにしても、生活費がいらなん条件良すぎない? ばあちゃんの知り合いて言うけど、どういう人なの? 大丈夫なの?」

何とか他人との同居生活を回避したくて、その話の怪しさを指摘すると、母さんはにつこりと微笑んだ。

「大丈夫よ。蒼ちゃんも初対面じゃないはずよ。蒼ちゃんがおばあちゃんの所に住んでいた時、遊んであげたことがあるって、結月さん言っていたもの」

俺も……会ったことがある?」

確かに小学校に入る前までばあちゃん家に住んでたけど、その頃の記憶はあんまりないんだよな。

ばあちゃんの家は、山間にポツンとある一軒家だった。

そんな場所でも人柄の良さから知り合いが多くて、色々な人がやって来ていた。

その中の一人だろうか？ キャラの濃い人達って印象は残っているのだが、その人達のことを思い出そうとすると、頭に霧がかかってわからなくなるんだよな。

「何歳くらいの人？」

「年齢は不詳なのよねえ。四十……いえ、三十代だと思っただけだ」

首を傾げる母に、俺は呆れる。

……適当だな。

「とにかく、独身のイケメンよ」

母さんの『イケメン』という言葉に、父さんの持つ新聞がカサツと音を立てた。それに気が付いた母さんが、父さんの腕にしがみつく。

「和真さんたら、妬いでるの？ いやあねえ。結月さんもイケメンだけど、和真さんの方がもっとかっこいいわよ！」

父はいたって平凡な顔である。

特徴もない平均的な日本人顔の上に、無口で無表情なタイプなので、モテる要素が見当たらない。

しかし、愛というのは審美眼を曇らせるのか、母には父が格好よく見えているら

しい。

仲が良いのは結構なことだが、息子の前でいちやつくのはやめてくれ。

俺が無表情で見ていると、母さんはようやく話が脱線していることに気が付いたらしい。コホンと一つ咳払いをした。

「お母さん、もう結月さんにお願ひしてきちゃったし、居候が嫌なら海外留学だから蒼ちゃんの選択肢は二つに一つよ！」

そこに母さんが日本に残るといふ選択肢はないのか。

母にべつたりとくつつかれながら、父は新聞を畳んで言った。

「まあ、そういうことだ」

そういうことって、どういうことだ。

あの日のやり取りを思い出して、俺は電柱にしがみつきのながらため息を吐く。

あの後、両親の海外赴任の用意やら俺の引越越し荷物のまとめやらで忙しく、あれよあれよという間に今日を迎えてしまったのだった。

高校を卒業するまでの三年間、居候暮らしだなんて……。

「何でこんなことになっちゃったんだろうなあ」
居候先の地図を、くしゃりと握りしめる。

高校生活によく慣れてきたと思ったのに、再び始まるコミュニケーションストレス。あまりにむごい。

さらに言えば、今日は緑眩キナしい五月の連休の初日だ。

高校に入って初めてのゴールデンウィークを、こんな状態で迎えるとは思わなかったよ。

どんよりとした気持ちで、快晴の空を見上げる。

怒りをぶつけようにも、両親は今頃空の上。

飛行機の中で「新婚気分ね」と、いちちゃつてるんだろうと思うと腹が立つ。

挨拶は母さん達が先に済ませたとはいえ、せめて居候先に俺を引継ぎしてから行ってくれよ。

「気が重いなあ」

そう呟いて、電柱の陰から見える高い外塀そとべいと立派な教寄屋門すきやもんを見つめる。

地図からするとあそこが、居候先の結月邸むづきていだ。

だがしかし、なかなかインターフォンを押せずにいた。

今まで俺がしたことと言えば、この通りをうろろしたあげく、電柱の陰から家の様子を窺うかがうという不審な行動だけ。

いい加減入らなきゃとは思うが、結月邸の立派さに俺は完全にビビっていた。

外塀に囲まれているからよくは見えないが、屋根などから察するに重厚感のある古いお屋敷やしきだ。

外塀の白壁も長く続いているようだが、これが全部敷地ということだろうか？

俺……ここを掃除しなきゃならないんだよな。

いい条件だと思っていたけれど、もしかして騙だまされたか？

そう思っただけだと思っていると、誰かが俺の肩をポンと叩いた。

ピクッと肩を震わせて、俺はゆっくり振り返る。

俺の肩を叩いたのは、若い警官だった。

もしかして、俺があまりに挙動不審きょうどうふしんだから、ご近所さんが通報したのだろうか。それともパトロール中に、不審者として認識されてしまったのか？

警官は訝いぶかしげに眉間みまげにしわを寄せる。そして、俺を上から下までじろじろと見な

がら言った。

「君、中学生？ 小学生……ではないよね？」

「は？」

中学生ならまだしも、小学生って。俺がいくら母親ゆずりの童顔だからって、そりやないだろう。

「九重このえ高校一年、小日向蒼真。明日十六歳になります」

「え……高校生？」

目を瞬またたかせる警官に、俺はげんなりする。

確かに、身長百五十センチで小さいし、よく年齢を間違われるけどさ。そんな驚くか？

俺は嘆息して、鞆を探り生徒手帳を提示した。

悲しいかな、年相応に見られないことは多々あるので、身分証明書として生徒手帳は常に携帯している。

警官は生徒手帳の写真と俺を交互に見て、「本当だ……」と呟いた。

失礼な人だ。

その気持ち顔に出ていたのだろう。警官は自分の反応が俺の気分を害したと気がき、「申し訳ない」と謝った。そして生徒手帳を返しながら、にっこりと微笑む。

「それで、小日向蒼真君。この辺じゃ見かけない顔だが、こんな電柱の陰で何してるのかな？」

……しまった。そういや俺、不審な行動をしていて声をかけられてたんだった。年齢を疑われたからって、早々に生徒手帳を提示するんじゃないかった。身元を知られてしまったではないか。

「あー……えっと……実はですね」

ちよつと情けないけど、「居候先の立派さに、尻込みしていました」って言わないといけないかな。

俺はちらつと、結月さんの家に視線を送った。その視線の先に目を向けて、警官は

「まごか……」と呟く。

ん？ まさかって、何？

……え、ちよつと、何でそんな眼差まなざしで俺を見るわけ？

若干の居心地の悪さを感じていると、警官はふーっと息を吐いて、ゆるく頭を

振った。

「確かに結月さんは美形だ。彼の後をつけて家を突き止めたあげく、家の前をうろつく女の子はよくいる。だがしかし、男の子もとは……」

俺、もしかして結月さんの追っかけか何かだと思われてるわけ!?

とんでもない勘違いに、俺は慌てて首を振った。

「違いますよ!」

結月さんって、そんなに美形なのか。父さんを格好いいって言っている辺りで、母さんの評価はあてにならないと思っていたんだけど……。

いや、今はそんなことを考えている場合じゃないな。

「俺は追っかけとかではなくて、今日からここに居候させてもらう者です」

そう俺が説明すると、警官は眉を寄せた。

「君、そんなにわかりやすい嘘はいけないよ。居候なら、何ですぐインターフォンを鳴らさないんだい?」

「それは、門構えが立派だったので、気が引けて……」

俯うつむきながら正直に言うと、俺と警官の間に沈黙が落ちた。

おそるおそる窺った警官の顔は、まるで信用していないそれだった。
ああ、疑われる前に早く説明すれば良かった。もう今更何を言っても信じてもらえないぞうだ。
いったいどうしたらいいのかと、俺が困り果てた時だった。

「蒼真君?」

ふいに耳心地のよい低い声で名前を呼ばれ、俺は反射的に振り返る。

そこには、長い黒髪を一つに縛った、和服姿の男性が立っていた。

背が高く、色白の美形だ。目は切れ長で、鼻筋がスツと通っている。

モデルか? いや、地味かつ平凡に生きてきた俺に、モデルのような華はなばな々しい知り

合いはいない。

じゃあ、何で俺の名前を……?」

俺が不思議に思っていると、その人物は俺の横に立った。

「お巡まわりさん。彼は今日からしばらくうちで預かる、知人のお孫さんです。何か問題でも?」

彼の物憂ものうれげな表情に、警官は目を丸くする。

「え、あ、いや……、本当に結月さんのお知り合いでしたか。これは失礼しました。いえ、そうであれば問題ありませんっ！ 君も言ってくれば良かったのに。あははは」

「ちゃんと、言いましたけど」

俺がジトリと見上げると、警官は笑いを止めて敬礼した。

「では私はこれで」

そう言い残し、近くに停めていた自転車に乗って、去っていった。

残されたのは、同情めいた眼差しで俺を見下ろす彼と俺の二人だけ。

「到着早々、災難だったね。外が騒がしかったから出てきたが、間に合って良かったよ」

「貴方が、結月さんですか？」

俺が問うと、彼はにっこりと微笑んだ。

「そうだよ。蒼真君にそう呼ばれるのは久しぶりだな」

俺を見つめる彼の眼差しは、とても優しいものだった。俺は姿勢を正して、お辞儀をする。

「あの……来て早々にご迷惑おかけしました。これからお世話になります」

結月さんは嬉しそうに頷いて、俺の背中にそっと手を添えた。

「ここじゃあ、落ち着いて話が出来ないから中に入ろうか？ それにしても、どうして家に入って来なかったんだい？」

不思議そうに尋ねられ、俺は気恥ずかしくなりながら言う。

「お屋敷が立派だったので、気後れしちゃって……」

そんな俺に、結月さんはくすりと笑った。

「立派と言っても、古いだけの日本家屋だよ」

そう言いながら、結月さんが数寄屋門の扉を開ける。扉の先には風流に苔むした地面があって、門から玄關まで飛び石が続いていた。

古い日本家屋というより、歴史ある高級旅館といった方がふさわしいだろう。

「やっぱり立派なお屋敷ですよ」

感嘆の息を吐く俺に、結城さんは苦笑する。

「そんな大層なものではないよ。長く使っている分、私は愛着があるけれどね。一部洋式にリフォームしているが、家の殆どは古い造りで畳敷きだし、蒼真君には少し不

便かもしれないな」

眉を下げる結月さんに、俺は首を振った。

「いえ、和室とか古民家とか好きです」

ばあちゃん家が昔話に出てきそうな茅葺^{かやぶ}きの屋根だったので、そういった雰囲気好きだった。

しかし結月さんが玄関の戸を開けて、俺は自分の発言の愚かさを知る。

玄関が広いつ！

十畳の部屋が、すっぽりと入るくらいある。古民家が好きとか言った自分が恥ずかしい。俺の思う古民家と、規模がまるで違う。

「ようこそ我が家へ」

結月さんは優しく微笑み、俺を招き入れてくれる。

「お、お邪魔します……」

俺は口元を引きつらせつつ、広い玄関の片隅に自分のスニーカーをそつと並べた。こんな場違いな所に置かれ、俺の靴のなんと肩身の狭そうなことか。可哀想すぎるそれにしても、玄関がここまで広いだなんて、このお屋敷の敷地はどのくらいいな

だろうか。

想像して、俺はゴクリと唾を呑む。

「まず客間に案内しよう」

背を向けた結月さんに、俺は慌ててついて行った。

結月邸は、外から見て想像していた通り、広いお屋敷だった。

いや、廊下が案内されたところからもっと奥に通じているのだから、俺の想像よりも広いのだろう。

事前に内見した母さんは「立派な平屋^{ひらや}のおうちよ」と言っていたけど、よくこのお屋敷をそう表現出来たもんだ。

結月さんが台所にお茶の用意をしに行っている間、俺は通された客間の中を見回していた。客間は二十畳ほどの広さがある。太い梁^{はり}や柱は、長い年月をかけて出た色に風格がにじんんでいる。

「静かだなあ」

隣の家と離れているからだろうか、外からの音が殆ど聞こえない。まるで、この家

だけ時間が止まっているようだ。

「蒼真君。正座していて、足は痺れないかい？」

「へ？」

後ろからふいに声をかけられ、天井を見上げていた俺は間の抜けた声を出した。振り返れば、湯呑を載せたお盆を持つ結月さんが立っている。

「若い人は、畳で正座することは少ないだろう？」

「あ、いえ、大丈夫です。慣れてます。ばあちゃん家も畳だったんで」

ビックリした。いつの間に部屋に戻って来たんだ、この人。気配を全く感じなかった。それとも俺、そんなにボーっとしていたか？

……いや、確かに注意力は散漫だったかもしれない。

駄目だ。これからお世話になるんだから、少しでも心証を良くしないと。

俺は慌てて居住まいを直す。結月さんはそんな俺の向かい側に座り、湯呑を俺と自分の前に置いた。一つ一つの動作が優雅で、彼を見ていると不思議と心が落ち着く。

切れ長の目は日本顔とも言えるのだが、高い鼻や彫りの深さはどこか異国の雰囲気たぐひを漂たなわせていた。

こういう人が着物を着て、尚且つ似合っちゃうんだから、神様は不公平だと思っ所作も随分綺麗な。普段から着ているんだらうか？ 作家って言っていたし。

俺の持つ明治の文豪のイメージと、結月さんの格好が重なった。

意外に形から入る人なのかもしれない。そう思うと、美形でも親近感がわいてくる。俺は口元に浮かぶ微笑みを、手でさりげなく隠した。

普段初対面の人と二人きりになると緊張するのに、結月さんといると何故か心地よかった。

結月さんは、お茶を飲んで一息つくくと、にっこりと微笑む。

「では改めて、自己紹介といこうか。私は結月清人。『碓氷近衛』という名で小説を書いています」

「碓氷近衛……さん？ 聞いたことあります。ミステリーのベストセラー作家で、そのプライベートは謎に包まれているんだって、同級生が話していました」

その人が結月さん？

俺が驚いていると、結月さんは嬉しそうに目を輝かせた。

「蒼真君も私の本を読んだことがあるかい？」

期待に満ちた眼差しに、俺は一瞬固まって視線を逸らす。

「あ……その……」

その反応で、俺が読んでないとわかったのだろう。結月さんは明らかに落胆くたんした顔をした。

「そっかあ……。私の小説の読者は、中高年層が多いしねえ」

がっかりさせてしまった。だけど、内容を把握していないのに、わかりきった嘘はつけない。

父さんが読んでいたことがあって、チャレンジしてみたことはある。だが、初めの数ページで止まってしまった。碓氷近衛の小説は、俺には難しくついていけないかったんだよな。

文章が重い感じだったから、てっきり年配の人が書いているのだと思っていたが、まさか結月さんが碓氷近衛だったとは……。

結構前から活躍している作家だよな？ 結月さんの見た目は三十代くらいだが、実際何歳なんだろう。

結月さんの年齢がわからないという母さんを、適當すぎると評したが、確かに結月

さんって年齢不詳だ。いきなり年齢を聞くのは失礼かなあ。仲良くなってから、それとなく聞いてみようか……。

そんなことを考えつつお茶をすする俺を、結月さんはジッと見つめる。

「それにしても、蒼真君、大きくなったね。私は昔、君のおばあさんの家によく行っていてね。君とも遊んだことがあるんだけど、覚えているかな？」

小首を傾げられて、俺は正直に首を振った。

こんなに顔の整った人なんだから覚えていても良さそうなものだが、記憶の欠片も出てこなかった。

実際に会ったら、思い出すかもしれないと思ったが、駄目みたいだ。

俺が眉を寄せて唸ると、結月さんは少し声を落として尋ねる。

「その時期のことは、あまり覚えてないのかい？」

「あ……そうですね。ばあちゃん家にお客さんがいっぱい来ていたこととかは、覚えてるんですけど」

この幼少期の記憶の欠落は、自分でも不安に思ったことがある。ばあちゃん家の間ま取りや、その当時のばあちゃんの様子なんかはよく覚えているんだけど。それ以外の

ことは、頭に霞がかかってぼんやりしていた。

「そうか。……仕方ないよ。まだ君は小さかったからね。一緒に生活していたら、思い出せることもあるかもしれないよ」

結月さんは、背を撫でるかのような優しい声で言う。その言葉に、俺は少しだけ気持ちが悪くなった。

「ありがとうございます」

俺がホッとして微笑むと、結月さんは一瞬驚いた顔をして、それから嬉しそうに頬を緩める。

「蒼真君は笑うと、目元や雰囲気は葵さんに似ているね」

葵というのは、ばあちゃんの名前だ。

俺を通してばあちゃんの面影をなぞっているのか、懐かしそうに目を細める。

自覚はないが、そういや前に母さんも言っていたな。俺は母さんより、ばあちゃん似だ。

「結月さんは、ばあちゃんとはどういった知り合いなんですか？ 年齢も離れているし、ばあちゃんは田舎に住んでいたから、知り合う機会はないんじゃないかって思う

んですけど……」

俺にとつてばあちゃんは、優しくて物知りで、それでいて肝の据わった人だった。

ばあちゃん子だった俺は、両親が海外から帰ってきて祖母と暮らせなくなるとわかった時は駄々をこねたし、数年前に亡くなった時は声がかれるほど泣いた。

大好きな祖母ではあるが、どこにでもある普通の田舎のおばあさんだ。こんなキラキラした人と知人と言われても、ピンとこない。

「葵さんは、こっちの世界では有名な人なんだよ。誰に対しても、分け隔てなく優しくてね。年は離れていたけど、親しくさせてもらっていたよ」

こっちの世界？ 作家の世界ってことか？ では、ばあちゃんの家色々な人が来ていたのは作家だったのだろうか？ どういった経緯でその世界の人と知り合ったのか、ますます謎が深まるばかりだ。

「さて、これから、家の中を案内しよう。古い家だからね。大概は畳んだけど、君の部屋はフローリングのものを選んだよ」

そう説明する結月さんに、湯呑を置く俺の手が止まった。

フローリングはありがたい。だが、選ぶほど部屋があるのか。食事は一人分作るも

二人分作るもそう変わらないが、この屋敷の掃除は大変そうだな。そうか。そうだよな。いくら知り合いの孫とはいえ、家賃や食費、光熱費もいらな
いなんておかしいと思ったんだ。

俺は掃除夫として雇われたんだな……。

そう確信し、俺はこれから案内される仕事場の広さを想像して、気付かれぬよう
そつとため息を吐いた。

客間を出て、結月さんの後について屋敷の中を見て回る。

お手洗いやキッチン、お風呂は新しくリフォームされていた。だがキッチンという
より旅館の厨房みたいな広さだったし、檜の湯船は三、四人入れそうなほど大きかつ
た。これは確かに一人で暮らすには、持て余すほどのお屋敷だ。

聞けば、かつて結月家はこの辺り一帯の大地主だったらしく、その関係で今も不動
産などを所有しているのだという。つまり結月さんは、代々続く名家のお坊ちゃん
ということだ。

しかし、襖を開けても開けても部屋はかりだな。これはお手伝いさんがいて当然

のレベルじゃないか？

あ……俺が居候兼お手伝いさんなんだった。

中庭に面した廊下沿いの障子を開けると、そこは今までに比べて物に溢れた部屋
だった。

十五畳ほどの部屋には、左右に本棚があつて奥に文机がある。文机の上や横に、
ノートパソコンやプリンターがなければ、明治時代の文豪の書斎かという印象だった。

「ここは私の部屋だよ」

どうりで一番生活感のある部屋だと思った。おそらく結月さんは、この部屋で過ご
している時間が長いのだろう。それにしても、着物を着ていたり文豪的な部屋だった
り、結月さんはやはり形から入る派なのだろうか。

「仕事の時はいつもここにいるから、何かあつたら呼んでね」

そう言って、部屋の障子を閉める。そこから廊下を少し歩き、突き当たりの障子を
開けた。その部屋はフロリングで、ベッドや勉強机があり、部屋の隅にある箆笥の
前には、俺が実家から送った段ボールや荷物が置かれていた。

「ここが蒼真君の部屋。とりあえず必要最低限の家具を揃えたけど、何か足りない物

立ち読みサンプル はここまで